



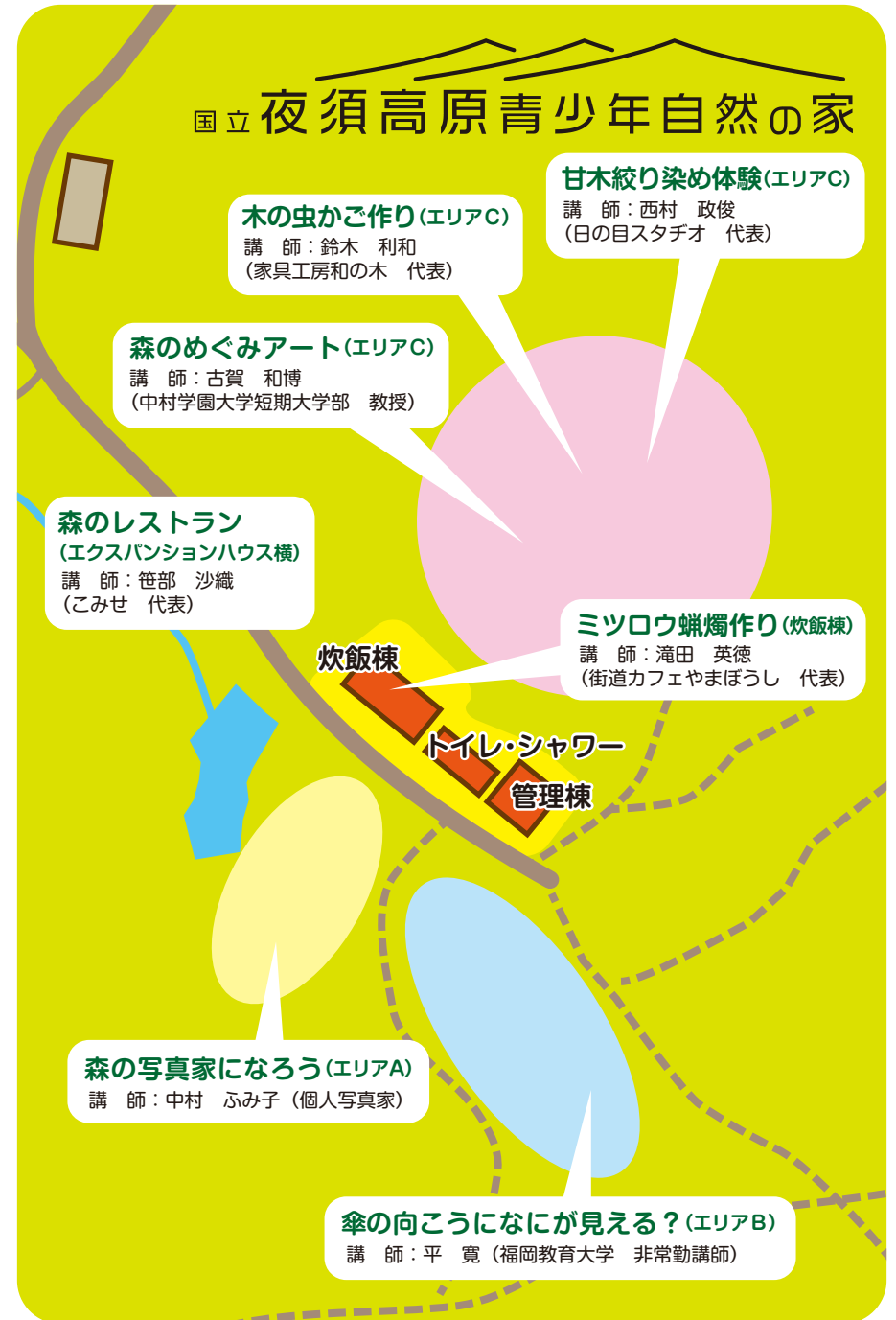
国立 夜須高原青少年自然の家
〒838-0202 福岡県朝倉郡筑前町三箇山1103
TEL:0946-42-5811 FAX:0946-42-5880
URL:<https://yasu.niye.go.jp/>
Mail:yasu-jigyoku@niye.go.jp

第1回 夜須高原こども芸術まつり



目次

- 国立夜須高原青少年自然の家 マップ……………2
- はじめに……………3
井上 智朗 (国立夜須高原青少年自然の家 所長)
- 夜須高原子ども芸術まつりにかける私たちの思い ……4
樋口 拓 (国立夜須高原青少年自然の家 次長)
- 傘の向こうになにが見える? (エリアB)……………5~6
講師:平 寛 (福岡教育大学 非常勤講師)
- 森のめぐみアート(エリアC)……………7~8
講師:古賀 和博 (中村学園大学短期大学部 教授)
- 甘木絞り染め体験(エリアC)……………9~10
講師:西村 政俊 (日の目スタジオ 代表)
- 森のレストラン(エクспанションハウス横)……………11~12
講師:笹部 沙織 (こみせ 代表)
- 木の虫かご作り(エリアC)……………13~14
講師:鈴木 利和 (家具工房和の木 代表)
- 森の写真家になろう(エリアA)……………15~16
講師:中村 ふみ子 (個人写真家)
- ミツロウ蝋燭作り(炊飯棟)……………17~18
講師:滝田 英徳 (街道カフェやまぼうし 代表)
- おわりに……………21
企画主担当 西川 真一郎
- 執筆者一覧……………22



はじめに

井上 智朗（国立夜須高原青少年自然の家 所長）

○ 新型コロナウイルス感染拡大の影響

昨年4月にコロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言が発出され、社会全体が自粛ムードに一変しました。そのような中、集団による生活体験や自然体験などいわゆる「3密」をよしとし、それを如何にして創り育てていくのかを長年の課題として取り組んできた当施設からは、本年度の予約キャンセルが相次ぎました。そして、毎日多くの子どもたちの明るい笑顔と元気な声で溢れていた館内は、その姿が消え閑散と静まりかえる日々が続くこととなりました。

○ ピンチをチャンスに

こうした状況下で、「体験によって子どもは育つ」を唯一の拠り所として、自然をはじめ夜須高原が持つ教育資源を活かした子どもたちの体験活動の機会と場の提供を、試行錯誤しながらも続けてきました。

コロナウイルス感染拡大による利用者の激減は、経験したことのない大きなピンチではありました。しかし、今一度「子どもの体験活動の在り方」や「夜須高原が持つ教育資源」、「支援者ネットワークの構築」「新しい活動プログラムの開発」「危機管理の見直し」など、様々な視点で施設を見直すチャンスともなりました。

○ 新事業誕生

ピンチをチャンスとして捉え、新しく生まれた事業が「夜須高原こども芸術まつり」です。

体験活動の在り方を見直すとともに、地域の教育資源を再探求し、支援者相互のネットワークを構築し、新しいプログラム提供へとつながったアート事業となりました。

本事業で子どもたちの明るい笑顔と元気な声を取り戻すきっかけとなったことはいままでありませんが、今回講師を務めていただいた地域の先生方とのネットワークや夜須高原の魅力再発見など多くの成果をあげることができたことは、今後の当施設にとって大きな財産ともなりました。

○ 体験の先生は子どもたち

今回、多くの方に参加していただき、久しぶりに夜須高原の森に元気な声がこだましました。

「体験によって子どもは育つ」とはよく言われますが、今回の事業で感じたことの一つに、子どもたちの豊かで自由な発想や行動力が、体験活動をより魅力的なものにするということです。

結果を気にすることなくその時の思いつきや感性で創作する子どもたちの姿から、体験活動の本質をあらためて教えてもらった気がします。

本事業に対して、ご支援・ご協力いただいた講師の先生方にご参加いただいた皆さまに、あらためて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

今後とも更に発展的・魅力的な事業となるよう努めて参りたいと思います。

夜須高原こども芸術まつりにかける私たちの思い

樋口 拓（国立夜須高原青少年自然の家 次長）

不確実な社会におかれた子どもたちにとって必要な能力として最近注目されているものがあります。それは、学力テストでは測れないいわゆる「非認知的能力」です。その基礎となるものは「感性」であるとされ、人間らしい感性を働かせより豊かな人生を送ることが求められています¹⁾。感性は「想像力」の源であり、「創造力」の発揮につながります。「創造力」は、不確実で定型的な答えの見つからない時代において大切な力となるのではないのでしょうか。私たちは、芸術体験がすべての礎となる「感性」を育むことができると期待しています。だからこそ、子どもたちに芸術体験の場と機会を届けたいのです。

ところで、この「感性」を定義しようとすると諸説あり、また曖昧な点も多いため難しいのですが、ここでは中嶋(2002)による主張²⁾に基づいて考えてみます。

自分の周りの環境からの刺激を五感という感覚を通じて受信すると、感情が生まれます。感情は、過去の経験に基づくイメージや思考を想起し、類推的思考としての想像力が働きます。そして、それを言語や詩歌、絵画、造形、音楽等として表現し他者に伝えるという行動になります。この一連のプロセスを「感性」と捉えます。そして人は、感覚→感情→表現のサイクルを何度も経験することで「感性」が研ぎ澄まされていくと考えられ、中嶋はこのサイクルを「感性のスパイラル構造」と呼びました。

このことは、20世紀初頭のアメリカの哲学者デューイが提唱した「経験を通じての学習」や「反省的思考の方法」³⁾にも見ることが出来ます。つまり、子どもたちの体験はただ体験しただけでは学習とはならないということで、その体験をどう感じ、どう考えたのか、自身に問いかけ内面に落とし込み、外部に表現していくことで初めて経験となり学習となるのだ、ということです。私たちはこれを「ふりかえり」や「わかちあい」と呼ぶ省察的活動として重要視しています。

こうした体験とそれに基づく経験は従来、子どもたちの成長過程で自然と行われる活動により育まれてきたのですが、そのための体験の機会や場が減少していることは周知の事実です。一方で、効率重視、成績重視の風潮が、受験に結びつく教科学習への取組に偏重し、芸術や体育等に関する教科や体験が軽んじられている可能性も懸念されています。この傾向は、COVID-19の感染防止対策としての休校や体験の機会や場の自粛により顕著になったといわれています⁴⁾。

そこで、こうした時代であるからこそ、子どもたちに体験を、自然の中での体験を踏まえた自己表現を、本物の芸術家が醸す空気感の体験を、との思いから当事業「夜須高原こども芸術まつり」を企画いたしました。自然の中での自身の体験をしっかりと内部に落とし込み、芸術作品として外部に自己表現する、この流れはまさに「感性」の涵養につながるものではないのでしょうか。私たちは、子どもたちの芸術活動の機会と場の振興、そして振興を地域の芸術家の皆さまと一緒に取り組んでいきたいと強く願っております。この企画はそのはじめの一步となるものです。この取組みが子どもたちや芸術家の皆さんの励みとなることが出来たら私たちの喜びとするところです。

【参考文献等】

- 1) 中教審答申、幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について 2016
- 2) 中嶋里子、「感性」の育成を志向した一つの授業構想 2002
- 3) J.デューイ著、栗田修訳「経験としての芸術」2012(J.Dewey, Art as Experience, PerigeeTrade,2005, first printed in 1934)
- 4) 国立青少年教育振興機構、新型コロナウイルス感染症流行下における公立青少年教育施設の運営に関する現状調査 2020

傘の向こうになにが見える？(エリアB)

講師：平 寛（福岡教育大学 非常勤講師）



傘の向こうになにが見える

実際に夜須の森の中に入ってみると分かることだけれど、とても居心地の良い森である。人の手が行き届き整備されすぎた森ではなく、程良く整え管理された（散策するのに十分な獣道がある）森は、訪れる人をほっとさせ、静寂の中にいざなってくれる。そして、一歩、しんと静かな深い森の中を枯れ枝や落ち葉を踏みしめながら入っていくと、日常のそぞうしさを忘れさせてくれる。また、柔らかい森の光が足下でチラチラと揺れるなか見る多種多様な植物たちは、見飽きる事はないし、特に朝の林立した杉の間から差し込む木漏れ日は、凜とした空気と共に、私たちをやさしく包み込んでくれる。そういった清々しい森の中に国立夜須高原青少年自然の家はある。広大な森の中にあるこの施設は、本館を中心にたくさんのロッジや炊飯場を伴うキャンプ場などがあり、コロナ禍で自粛を余儀なくされた子どもたちにとっては、うってつけの遊びや学びの環境だ。

私は今回、ここでおこなわれた“第1回夜須高原こども芸術まつり”に参加させていただいた。このイベントは、コロナ禍で行事やイベントの中止・自粛で閉塞感を抱いたまま生活している子どもたちに、何か大人たちで出来る事はないかと、青少年自然の家の職員の方々が立案し、企画運営したイベントである。季節は秋まただ中、幸いな事に天候にも恵まれた。

このイベントで私は、施設内のキャンプ場に隣接した深い森の一画で、子どもたちとその親御さんを対象にした「傘の向こうに何が見える？」と題したワークショップを二日間にわたっておこなった。子どもたちと森の中に透明な傘を持ちこみ、その傘を開いて覗きこむ事で見えてくる風景や覗きこむ事で湧き上がってくる感情、思いついた事などを色ペンで描いていき、出来上がった大量の傘の作品で森の中をインスタレーションした。

透明な傘というひとつのレイヤー（層）をとおして森の中を覗き込む事によって見えてくる風景は、子どもたちに日常とは違った不思議な感覚を思い起こさせるきっかけとなったのではと、思っている。また今回のワークショップでは、ただ作品をつくり、展示する事が目的ではなく、子どもたちが、思いを募らせながら前述したような森の中を探検し、面白いものや興味をひくもの、落ち着く場所などを見つけ出す事であった。大事なものは、子どもたちひとりひとりが、どう感じ、何を思い、自分なりの何かを発見できたかが大切なのである。表現に答えなんてないんだから。

ワークショップが終わり、子どもたちや保護者の方たちがいなくなった多くの傘作品に覆われた森は、不思議で魅力的な空間へと変貌していた。まだ子どもたちの残像が残っている森の中で私は、子どもたちのエネルギーを、子どもたちの可能性を思い知らされた。

これからも子どもたちの可能性や発見のきっかけづくりの手助けを続けていきたい。

発案の段階から、企画運営に尽力頂いた青少年自然の家の職員、スタッフの皆様には、深く感謝申し上げます。



平 寛
（福岡教育大学 非常勤講師）

森のめぐみアート(エリアC)

講師：古賀 和博（中村学園大学短期大学部 教授）



夜須高原こども芸術まつりの余韻

2020年はCOVID-19の世界的パンデミックとして後年の語り草になることは明らかで、振り返ると2～3月には前代未聞の全国一斉臨時休校、4月に発出された緊急事態宣言でも学校の休校・自粛生活が続き、こうした環境が子どもたちの発育や発達に及ぼす影響について様々な危惧があるのも当然だろう。そんな中で青少年自然の家が敢えて仕掛けるイベントが「こども芸術まつり」である。新しい生活様式が推奨され、まだ従来と同様の企画が叶わないことも背景にありつつ、定番の野外体験活動に「芸術」的視点を加えたことは、今回の企画の主旨であり新たな試みでもあろう。

自粛生活が続く中で、私たちはメンタルな閉塞感や漠然とした得体のしれない不安になんとか対処しようとしている。音楽家がネットを通しての連携を模索して新たな表現を発信している事からも分かるように、芸術は常に心に栄養を注ぎ視覚や聴覚を通して私たちの感覚や感性に刺激や喜びを与えてくれ、それは文化的に豊かな生活を送る上で必要不可欠だ。では美術の作用とは？ 個人の心情にじっくり向き合い、自らの意思や意図を持って積極的に材料や環境に関わって、頭と体と心を動かして制作する、さらに時間・空間を家族と共有することで、ストレスフルな生活での心のモヤモヤを解放する。今回「第1回 夜須高原こども芸術まつり」が子どもたちへそうした活動を提供する「場」となったことは、素晴らしく意味のあることだった。

私が担当した講座では、参加者が隣接する森へ行き自分で選んだ材料でモビールやヤジロベエを作るワークショップを行った。採集された木の枝で大きな多面体構造を組み立て、装飾用にカラフルな毛糸を使って枝に巻き付けたりオブジェの隙間に張り巡らせたりした。正味2時間の限られた制作であったが、大人も子どもも作業に没頭して完成させた。結果、一つとして同じものがない、個性的でカラフルなオブジェが出来上がった。最終的には森の中のギャラリーに見立てた展示場所へ移動し、モビールは木立の間に張った紐に吊り下げ、ヤジロベエは杭の上でバランスを取るように設置し、皆で鑑賞した。木々の緑を背景にカラフルな毛糸や装飾が目を引き、個々のオブジェもとても魅力的に見えた。作品が群をなすことでその場所の雰囲気を変えてしまうような、総体としてのインスタレーション(仮設的作品:現代美術用語)の展示になった。参加した子どもたちがここで何を見て何を感じたかはそれぞれ異なるだろう。ただ、共通するのはコロナ禍で再確認する物づくりの楽しさと非日常の美的視覚体験であった。彼らの記憶や感覚に今回の体験の余韻が少しでも長く残ることを願う。学校以外では美術館や博物館が行う社会教育としての美術教育が多くを占めているが、昨今のポピュラーな言い回しの「アート」を、様々な環境でより身近な日常に取り入れる、こうした企画が定番となって広がることを期待している。



古賀 和博
(中村学園大学短期大学部 教授)

甘木絞り染め体験(エリアC)

講師：西村 政俊 (日の目スタジオ 代表)



甘木絞り

私は朝倉市の伝統工芸「甘木絞り」を生業としているのですが、伝統工芸を生業にしている人は年々減ってきております。この現状を打破するためには子どもの頃から伝統工芸に触れる機会を増やしていかなければいけないと前々から思っておりました。そんな中、たまたま知人を通じて本事業のお話をいただいた時はこちらとしても大変ありがたい思いでした。



西村 政俊
(日の目スタジオ 代表)

また、キャンプ場を利用した自然の中で絞り染め体験ができるとのことだったので、室内での絞り染め体験とはまた違った開放的な体験になると思い私自身も楽しみにしておりました。芸術まつりということだったので、絞り染め体験以外にも何かを感じ取ってもらえたらいいなと思い、空間づくりにもこだわって自然と調和したアートな空間を目指しました。

教える側としても、とても気持ちのよい空間になって貴重な体験ができてとてもよかったです。個人的には体験後のキャンプまでセットで楽しむのがおすすめだと感じました。(キャンプ用品を貸していただきありがとうございます)

実際の絞り染め体験では絞り染めの原理、藍染めの染め方、大変さなど見て聞いて学ぶだけではなく実際に体験して色々と感じてもらえたのではないかと思います。

布を絞り、染め、ほどいて広げた時に初めて現れる絞り染めの模様喜んで子どもたちを見られて少しでも楽しんでもらえていたらありがたいなと思いました。

保護者の方たちも楽しんでいただけていたようでよかったです。(むしろ保護者の方が楽しんでいたので?)

また、絞り染めのデザインは自由にしていたのですが、私が今までやってこなかったようなデザインをしている子どもたちもいて、逆にこちらが絞り染めのデザインを学ばせていただくような子どもたちもいました。

今回は時間の関係上、簡単な絞り染めを行いました。意欲のある子どもにはもう少し難しい針や糸を使った絞り染めに挑戦して欲しいなと感じました。しかし難易度が上がるほど大勢を相手に絞り染めの説明ができないので、そこは絞り染め体験をしていく上で今後の課題だと思いました。

今後も子どもたちへ伝統工芸に触れる機会、そして自然と触れる機会を継続的に作れたらいいなと思いますので、来年も本事業が行われるのであれば是非とも参加させていただきたいと思っております。

森のレストラン(エクспанションハウス横)

講師：笹部 沙織 (こみせ 代表)



森のレストラン

昨年、夜須高原で開催された「第一回こども芸術まつり」に石窯ピザの講師役として参加させていただきました。今まで経験のないことで不安も大きかったのですが、スタッフさんやボランティアの皆さんに助けられて無事終えることができました。

開催当日はファミリー単位での受付だったのですが、子どもたちが保護者に見守られながらのびのびと創造力を、働かせて動く様子が印象的でした。中にはやりたくなさそうに参加した子もいたのですが、説明を聞き、粉に触れるうちにみるみる表情が変わっていく様子も面白かったです。

ピザを食べるまでにはいくつかの工程があり、粉に少しずつ水を加えて一つにまとまるように自分の手で捏ねていく。そのあと生地を休ませて発酵させる。発酵させるには時間もかかるため、しばらく体を使って遊んでもらいました。発酵が終わると、生地を二つに分け、ベンチタイム。散々待たされた子どもたちは、ここで「えー?! またー?!」と声があがることもありました。笑

しかし、ここは10分程度なのでその間に材料を切る作業をしてもらいました。この作業は包丁を、つかうため、1番不安なところでもありましたが、お家で普段から手伝いをしている子も多かったように感じました。初めての子は初めてなりに気をつけながら、自分の好きな大きさに切ることができていました。今回は切るサイズは指定せず、「食べたい大きさ」にしてもらいました。

いよいよ生地を伸ばしトッピングをして石窯の出番です。筑前町の地粉「麦太郎」の味を楽しんでもらいたく、ソースは無しでシンプルなトッピングです。

会の始めに、窯の番人「とらのすけさん」の説明で火の怖さを知っている子どもたちはきちんと約束を守りながら自分のピザを自分で焼き上げていました。少しずつ生地が膨らんでチーズが溶ける様子は大人も子どもも楽しんでもらえたのではないかなと思います。

熱々のピザに筑前町の名産「ひめぎ姫酢」をぎゅっと絞って召し上がっていただきました。喜ぶ子どもたちの顔が今回のイベントで1番心に残った場面でもありました。

自然の中で体を使い、経験したことが子どもたちの今後にも少しでも何かしら残すことができているのは嬉しいです。生きる上で大事な「食べる」ということは、その時だけで完成する訳ではなくて、粉や畜産物などお世話して育てる人がいて、それを売れる状態にする人がいて、そしてそれを調理してくれる人がいて食卓に並んでいる、ということをもう少し伝えられていたらよかったな、というのが反省点としてありました。

今回はこのような素晴らしい経験を、させていただき本当にありがとうございました。



笹部 沙織
(こみせ 代表)

森の写真家になろう(エリア A)

講師：中村 ふみ子 (個人写真家)



子どもたちは天才森の写真家

私は森へ行き、さまざまな表情を見せる森の風景や、自然から感じるちから強さを写真におさめ、森の魅力を発信することをライフワークとしており、時には森林浴のガイドとして森を案内することもあります。「自然の中で子どもたちがアート体験をする」という今回の企画、写真と森、私が普段から関わっていることではあるのですが、その二つの掛け合わせは初の試み。どうすれば自然の中で写真を撮る楽しさを伝えられるか？ お話を頂いた時にプログラム作りに頭を悩ませました。

まず、お題を決めて撮影することや、ゲームなど取り入れるプログラムを考えたのですが、時間配分などを考えると一番伝えたいことがぼやけてしまうように感じました。そこで、私が森で撮影している時に大切にしていることに的を絞りました。私が写真を撮る際に大切にしているもの、それは「自分がワクワクする気持ち」です。写真というのは、自分がワクワクしたものを「形」にすることだと私は感じています。差し込む光の加減で色が変わったり、見る角度を変えると違う一面が見えたり、森の中は発見に満ち溢れています。目の前の森から自分だけのワクワクを発見する。それを子どもたちにも感じてもらいたかったです。

ちょっとしたカメラの使い方を覚え、撮影をする前には自分は何を伝えたいのかを少し考えるだけで、「発見」したものを自分が思う「形」に近づけることが出来ます。簡単な説明が終わると子どもたちはすぐさま外へ飛び出し、写真を撮り始めました。

木に生えたコケを見つけるお子さんや、草むらの中に分け入り何かを見つけ、カメラを向けるお子さんなど、何も言わなくても思い思いに撮影を楽しみ、次々と気になるものを見つけ出していました。空に向かってカメラを構えていたお子さんに話を聞くと「地球を撮ってる！」との答えが！！子どもたちの表現の面白さを感じました。自由に撮影したいものを探し、それを伝えようとカメラを覗いている子どもたちの輝いた表情が印象的でした。

自分の好きなものを見つけ、新しい興味の種を見つけ、他の人が撮影したものを見ることで相手を知り、自分の世界が広がる。被写体を探し、写真を撮ることを通してそんなことを感じてくれていたら嬉しく思います。特別な何かをしなくても「写真を撮る」場所と時間を作るだけで子どもたちには充分なかな、と今回のイベントを通して感じました。



中村 ふみ子
(個人写真家)



木の虫かご作り(エリアC)

講師：鈴木 利和 (家具工房和の木 代表)



第1回 夜須高原こども芸術まつりを終えて

まずこのようなイベントの企画・運営をして頂いた夜須高原青少年自然の家の職員の方には感謝申し上げます。

また木の虫かご作りに参加頂いたご家族の皆さまありがとうございました。

新型コロナウイルスにより行動が制限され時代の変わり目に直面し、私自身も当工房で定期的に行っていた虫かご作りのワークショップにやりづらさを感じていた時期でもありました。

子どもの成長過程において体験する事、経験する事の重要性はこのコロナ禍といえど無視できるものではありません。

しっかりと感染対策を行い、子育てリテラシーの高い保護者の方とその子どもたち。そして私たち作り手をマッチングさせる場として夜須高原の大自然はwithコロナ時代の体験の場としてとても可能性を感じています。

今回は2日間の参加ではありましたが45名の子どもたちと木の虫かご作りを楽しむ事ができました。個人では苦勞する集客の面からしても夜須高原青少年自然の家様のおかげで多くの虫かごを子どもたちに届ける事ができた事をうれしく思います。

この木の虫かご作りは

- ・自然素材で作る。
- ・自然で遊ぶ。
- ・自然を守る。(脱プラスチック)

というコンセプトのもと4年ほど前、当工房で小さく始めました。今まで400人程の子どもたちに木の虫かご作りに参加頂いています。世の中には物が溢れ、ボタンひとつで買い物が出てしまう時代です。この木の虫かごを商品(物)としてではなく体験(事)として今後も子どもたちに届けること、モノからコト時代に移り変わる中、こども芸術まつりの様な体験型のイベントの需要は今後益々増えるものと思われれます。

実際参加頂いた子どもたちはというマスク姿で堅苦しさはあったものの、作り終わるとすぐさま虫かごを抱えて冬の森の中に虫を探しに向かって行きました。

今回こども芸術まつりにお誘い頂き、多くの子どもたちと虫かご作りができました。また、とても楽しい2日間を送らせて頂きました。ありがとうございました。

こども芸術まつりが今後も2回、3回と続いてゆく事を期待します。

木の虫かご作りを通して木工という職業の事も子どもたちに伝える準備をして、次回のお誘いお待ちしております。



鈴木 利和
(家具工房和の木 代表)

ミツロウ蝋燭作り(炊飯棟)

講師：滝田 英徳 (街角カフェやまぼうし 代表)



第1回子ども芸術まつりを行っての感想

「夜須高原子ども芸術まつり」は、大勢の子どもたちや保護者の方が参加して、楽しくエネルギーに満ちた活動になり感謝いたします。

日本蜜蜂は古くから日本の山に住み、少しも目立つことなく山や畑を根底から支えていることに驚きと畏怖の念を抱きます。私どもは10年間日本蜜蜂の養蜂をして観察を続けておりますので、健全な自然が失われ、温暖化が進行していくことが伝わってきます。蜜蜂がいなくなると、世界の食料の1/3~1/2は育たなくなると言われています。

子どもたちや保護者の方に以下のことを伝えたいと思いました。

- ① 1本のろうそく作りから小さな蜂に眼を向けて頂きたい。「小さな蜂がトマトやいちごやスイカをつくっていること(受粉手伝い)、小さな蜂が山のドングリやクリの実を作っていること」ドングリやクリの実はイノシシ達の餌です。山にドングリが沢山あると、イノシシ達は里に下りてこないで、畑は荒らされません。ドングリの木は根が深いので崖崩れが少なくなります。
- ② 私たち人間が小さな蜜蜂やその他の動植物に支えられていること、自然が壊れていくと私たち人間も生きていくことが困難になること、そういう生態系に思いを馳せての1本の蝋燭作りです。

6回にわたるワークショップを実施しました反応は以下の通りです。

① パワーポイントによる講義

保護者の方たちは熱心に聞いていました。子どもたちは最初、眠そうにしていました。子どもたちに興味をもってもらうためにクイズ形式にしたところ、子どもたちは目を輝かせて話に興味を持ちました。

② 蝋燭づくり

子どもたちや保護者の方もとたんに元気になり、楽しく、蝋燭づくりにチャレンジしました。湯煎の蜜蝋(みつろう)にタコ糸を短時間(1~2秒間)浸して引き上げるのですが、「早く蝋燭を成長させたいという思いで長時間(例えば5秒間)浸すと蝋燭が成長しないですよ」と注意喚起しながらやってもらいました。性格(素直な子、頑張り子)によって蝋燭の成長速度に差が出たことが大変興味深かったです。

蜜蜂が一生かけて集めるのはティースプーン1杯の蜂蜜です。その一部に酵素を加えて出来るのが蜜蝋になります。限りある資源の蜜蝋を大事に分け合う気持で蝋燭を作って頂きたいと思いました。

孫もこみせさんのピザ作りやむしかご作りに参加させてもらい大変楽しかったようで、家に帰った後で経験したことをキラキラした目で話をしていました。余程楽しかったのでしょう。



滝田 英徳
(街角カフェやまぼうし 代表)



終わりに

企画主担当 西川 真一郎

【令和2年4月7日 コロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言発令】

多くの予約で埋まっていた予約受付台帳は、キャンセル一色になり、自然の家からは利用者の姿が消えました。

その一方で、新緑に覆われた山々。地面を彩る多くの草花。あちらこちらで飛び回り春の訪れを喜んでいる山鳥たち。まるで夜須高原の山全体が賑やかに笑っているかのようでした。

本来この時季には多くの利用者が訪れ、私たち職員は周りの自然環境に目を遣る間もなく1日が過ぎていきます。皮肉にも、利用者がいないことで夜須高原の自然の素晴らしさを改めて知り、豊かな自然環境の下で活動をさせてもらっていたことに気付かされました。

当たり前だった日常は、こんなにもたくさんの宝物で満ち溢れていたのです。

「この素晴らしい自然環境を多くの子どもたちに見せてあげたい。そして、再び子どもたちが笑顔で走り回る姿が見たい。」

利用者の声が聞こえない静かな自然の家で、いつ利用者が来てもいいように準備を進めながら、そのようなことを思う日々がしばらく続きました。

「コロナ禍で奪われた子どもたちの体験の機会と場を、同じく様々なイベント等の機会を失った地元の芸術家たちの協力を得て、何としても創り出したい。」

初夏の始まりを告げるニイニイゼミが鳴き始める頃、『夜須高原子ども芸術まつり』の実施計画が立ち上がりました。

10月から11月にかけて全8回、毎回50名ほどの参加者を募って実施する計画です。趣旨に賛同してくれる仲間が次々に集まり、準備も急ピッチで進んでいきます。

【令和2年9月21日 参加者受付開始日】

不安はたくさんありました。コロナ感染拡大防止対策を行い、準備は万全にしたつもりです。しかし、果たして来てくれるのか…。

ホームページ上の募集フォーム受付開始時間となりました。

不安は杞憂でした。受付開始と同時に予約が次々に入ります。全8回の日程が開始2時間ほどでほとんど埋まり、一時期サーバーが混雑して受付を停止せざるを得なくなったほどです。

『夜須高原子ども芸術まつり』は多くの参加者で賑わいました。芸術家の方々から様々な体験の機会と場を提供して頂き、たくさんの小さな芸術家たちも生まれました。

芸術作品で彩られた森では、子どもたちが駆け回り、笑い声がこだまします。

ずっと待ち望んでいた光景が目の前に広がっていました。

【令和2年11月29日 夜須高原子ども芸術まつり最終日】

最後の参加者をスタッフ全員で見送りました。2か月間の余韻と芸術作品を残して、森は再び静かになりました。

静かになった森の中を歩いてみると、落ち葉や枯れ枝を踏む音が森に響きます。あんなに賑わっていた森にもう子どもたちの姿はありません。しかし、周りを見渡すとそこには子どもたちの作品群と森とが一体となった芸術作品が出来上がっていました。

頬を撫でる北風に冬の訪れを感じつつ、次の季節の新たな出逢いを森と約束して、冬支度を始めた森を後にしました。

【 執筆者一覧 】

井上 智朗 (国立夜須高原青少年自然の家 所長)

「はじめに」執筆

樋口 拓 (国立夜須高原青少年自然の家 次長)

「夜須高原子ども芸術まつりにかける私たちの思い」執筆

平 寛 (福岡教育大学 非常勤講師)

「傘の向こうになにが見える」執筆

古賀 和博 (中村学園大学短期大学部 教授)

「夜須高原子ども芸術まつりの余韻」執筆

西村 政俊 (日ノ目スタジオ 代表)

「甘木絞り」執筆

笹部 沙織 (こみせ 代表)

「森のレストラン」執筆

中村ふみ子 (個人写真家)

「子どもたちは天才森の写真家」執筆

鈴木 利和 (家具工房和の木)

「第1回 夜須高原子ども芸術まつりを終えて」執筆

滝田 英徳 (街道カフェやまぼうし 代表)

「第1回 子ども芸術まつりを行っての感想」執筆

西川真一郎 (国立夜須高原青少年自然の家 事業推進専門職)

「おわりに」執筆

令和3年3月 発行

【 発行 】 独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立夜須高原青少年自然の家
〒838-0202 福岡県朝倉郡筑前町三箇山 1103
TEL：0946-42-5811

【デザイン・印刷】 末松印刷株式会社
〒812-0892 福岡市博多区東那珂 2-4-36
TEL：090-411-6131

○当該情報につき読者の皆様が損害を被った場合でも当施設は一切責任を負えません。
読者ご自身の責任においてこれらの情報をご活用下さい。
○無断転載・複製を禁じます。ご使用の際には、発行元まで連絡願います。